

排満を叫んで駆け抜けた男の生涯（続）

——徐錫麟略伝——

（東京大学大学院博士課程）大里 浩秋

目 次

はじめに

1. 生いたち

2. 決 断

3. 実 践

4. 準 備 (以上、前号)

5. 決 行 (以下、本号)

あとがき

5. 決 行

光緒32（1907）年5月26日の朝7時、徐錫麟は陳伯平、馬宗漢と共に巡警学堂に到り、学生を野外運動場に集めて演説し、諸君はまさに団結して祖国を救わなければならない、と絶叫して、その語気は慷慨悲壯を極め、声は周りを震わせたが、学生達は彼の語る真意が理解できなかった。⁽¹⁾

8時、巡撫恩銘が予定よりも早く学院に現われ、⁽²⁾その後続々と役人達が到着した。徐錫麟は、彼らをまず宴会に招き入れて一網打尽の計を実行しようと考え、宴会をやってから卒業式⁽³⁾を挙行することを提案したが、恩銘は認めず、式のあとで宴会をしようといったので、次の計画に移らざるを得なかった。⁽⁴⁾学生達は整列して役人50名余を迎え、これから野外演習の検閲が始まろうとした時、徐錫麟は急に教室内の学課を見てほしいと要請し、恩銘以下は第三の式場に移動した。⁽⁵⁾9時、式場の壇上に恩銘以下が並び、徐錫麟は軍服に身を固めてやはり壇上に立った。⁽⁶⁾まず「官生」が列をなして巡撫に鞠躬の礼を行ない、続いて「兵生」が同様の礼を行なおうとした時、徐錫麟が恩銘の前に進み出て、「総督閣下に申し上げます。本日革命

軍が事をおこします」と告げた。⁽⁷⁾恩銘は驚いて、どこからその情報を得たのかとききかえそうとした時には、徐錫麟が爆弾を投げつけており（不発に終わった）、続いて馬宗漢がピストルを発射したが、恩銘の右手にあたっただけだった。⁽⁸⁾その時徐錫麟は、口では「閣下御安心下さい、この刺客共は私が必ず捉えてお見せします」といいながら、自分の靴の中に隠していたピストル二丁を取り出して左右続けざまに打ち、⁽⁹⁾陳伯平らもそれに従ったので、恩銘の身には合せて8発当たったが、まだ意識が残っていた。恩銘をかばった役人の一人はその場で絶命したが、大多数の役人は、徐錫麟の「刺客」という言葉をきいて、悲鳴をあげて逃げ散った。徐錫麟は指図に従わなかったという理由で収支委員顧松を撃ち殺し、⁽¹⁰⁾門番一人も撃ち殺した。⁽¹¹⁾その間、恩銘は必ず徐錫麟を捕えよと大呼し、城門を閉じ兵を派遣して逮捕に当るよう指示して、かごに担がれて去っていった。

恩銘が重傷を負って去り、役人達が散り散りになった学堂には、少数ながら学生が残っており、⁽¹²⁾徐錫麟は彼らに、「巡撫は顧松に撃たれた。我らは軍器庫に行ってそこを保護しなければならない」と語り、刀を抜きながら、大声で「我々は奸細を捉えに行く。すみやかに我々に従うべし」といった。⁽¹³⁾陳伯平、馬宗漢の二人は左に刀を握り右にピストルを握って学生達をにらみつつ、号令をかけて移動させようとしたが、一人の学生がぐずぐずして従わないのを見ると、徐錫麟はその学生を斬殺した。そこで、残りの学生は勢いに押されて服従せざるを得なかった。⁽¹⁴⁾しかし、軍器庫に向う途中、支給されたピストルを捨てて逃げる学生がおり、最後まで従った者は二十名前後だった。軍器

庫に近ずいた時、徐錫麟が「巡撫はすでに撃たれた。我々は軍器庫の保護を命ぜられた」と叫ぶと、軍器庫の総辦周は事態がうまくないのを察して逃げてしまった。⁽¹⁵⁾徐錫麟は軍器庫を占拠して抵抗しようと考え、学生を動員してそこに置いてあるいくつかの砲弾を試験させたが、誰もその使い方を知らなかった。⁽¹⁶⁾その頃には、蜂起鎮圧に派遣された兵士達が続々と軍器庫を包囲し始めたので、徐錫麟は、陳伯平、馬宗漢と共に正門を守って、兵士6名を銃殺した。その後相対峙すること6時間、⁽¹⁷⁾勢力が及ばないのを見て、徐錫麟は軍器庫内に引き返し、⁽¹⁸⁾塀を越えて方という姓の医者⁽¹⁹⁾の家に逃げこんだ。陳伯平は、撃ち合いの際に弾にあたって死に、馬宗漢はその場で逮捕され、⁽²⁰⁾前後21名の学生や人夫が逮捕された。軍器庫を囲んだ兵士達は、敢えて前進しようとしなかったもので、徐錫麟を捉えた者には1万元の賞金を出すことになり、そこで兵士はやっと前に進むようになった。軍器庫に攻め入った時、徐錫麟の姿が見当らず、彼の軍服と帽子が地面に落ちていたので、さては変装して逃げたかと大さわぎになったが、4時になって、近くの方宅を捜査してやっと逮捕した。

以上、『大首領』の記述を通して見た蜂起当日の徐錫麟は、限られた機会を最大限に利用して恩銘らを効果的に殺そうとしており、恩銘を撃ったあとは、自分が撃ったことを偽わることで学生達を軍器庫に連れて行き、清軍と戦ったが、敵わないとなると隣家に逃げてそこでつかまった。

他方、^(註)で主に対比した『浙案紀略』の記述に従い、「我的老師」で補強するならば、徐錫麟は当日の行動を卒業式典での銃殺に賭け、自分が革命党であることを役人達に公言し、学生達にも真っ向から革命を呼びかけて軍器庫への動員を計り、断呼として闘った末に逮捕された。そこで、いずれが事実なのかという問題になる。従来この蜂起部分に言及したものは、『大首領』に記載されたような内容、つまりは、

清朝側が公表した資料を使い、更に当時流布したさまざまな新聞情報などをアレンジして書きあげたであろう「事実」と、陶成章がまとめたような内容、つまり、革命派の立場から、『大首領』などでいいふらした「事実」を批判的に利用し、それに革命派内部の別の情報を組み込んで再構成したと思える「事実」の二つを基本材料とし、その二つから適当に取捨選択しつつそれぞれイメージを作り上げたものだったと考えられる。しかも、辛亥革命が成功してからは、陶成章の事実の方を重んじる傾向が圧倒的で、極端な場合は『浙案紀略』の記述こそが、徐錫麟の安慶蜂起の全てだと理解されてきたのではないかと思えるほどである。しかし、私は、『大首領』の記述は、権力に歯向かう逆賊徐錫麟の行為を卑しめようとする意識からの、うがった解釈や、事実のでっち上げをしているのではないかと疑う一方、『浙案紀略』に描かれた徐錫麟にも、『大首領』の意図とは正反対に、「あるべき革命家」として美化しすぎたところがあるのではないかと推測する。そこで、私も大方の論者と同様、徐錫麟の当日の行動は「革命的」で断乎としたもので、その点で基本的には『浙案紀略』に記されたような高揚した精神を持続して行動を展開したと考えるが、それでもなお蜂起の成功に向けてあらゆる努力を傾ける過程で、『大首領』に記されたような行為も一部あったのではないかと考える。しかし、両者の対蹊的な内容のどちらも捨て難く、今この徐錫麟の生涯のクライマックスは、判断を停止したまま矛盾する内容を本文と“注”に並記するにとどめたいと思う。

逮捕されてすぐに、督練公所での取り調べが始まった。

まず、臬司である満州人毓朗が取り調べ官として登場すると、徐錫麟は怒りをむきだしにし、大声で「貴様は幸いにして死なずにここにいるが、どうして私を裁けるというのか。華甫（馮煦）を呼んでこい」と叫んだ。毓朗は恐怖におののいて退場し、恩銘が倒れたあとに代理巡撫となった漢人

馮煦が自ら登場するしかなく、彼は徐錫麟に蒲団⁽²¹⁾を与え、あぐらをかかせた上で審問を始めたという。

ところで審問内容に関する記録は多少の表現の異同を除いて全ての証言に共通する内容であって、すでに見たように、当日の逮捕されるまでの行動の記述に、書き手によるさまざまな出入があるのとは際立った対称をなしている。それは取り調べ時の情報は、全て権力側から一方的に公表されるもので、それ以外の出所はあり得ないことに起因するのであろうが、革命側からいえば、公表された内容に疑義をはさむ必要がない程に、そこでの徐錫麟の対応が堂々としてスキのないものだったことを示しているのであろう。

具体的に審問内容を見ると、巡撫が君の面倒をみてきたのに、逆に恩をあだで返したのはなぜかの問いに、巡撫は“私恵”を施したのであるが、私は“天下の公憤”を晴らしたのであるといい、ふだん署中で殺す機会はいくらでもあったのに、なぜきょうになって実行したのかの問いには、署中は“私室”であり、学堂は“公地”である。真の男たる者が事業を成す際は大衆の面前にそれを明らかにすべきであると答えている。いずれも「公私」の別を語ったもので、彼の行動原理の一端を開陳したのであろう。孫文ら同盟会との関係を追及された時は、孫文は私が従うに値しない人物だ⁽²²⁾といい放ち、今度の行動は、ただ光復子・陳伯平と宗漢子と謀ったものだという。戦闘中に死んだ陳伯平については、名前を歴史に残すためにフルネームを明かし、逮捕された馬宗漢のことは、配慮して別号しか述べていない。また、学生達は、我々に無理矢理参加させられたのだから罪はない、彼らの罪は私一人が負うべきもので、私の身を八つ裂きにしても構わぬから、決して彼らを罰するな、という。更に、光復会の同志のことをきかれて、一言も答えず、同僚中には共謀者がいないとつぶねた。弾圧にさらされた革命家として、まさに理想的な内容で取り調べ官に相對した様子が

うかがわれる。続いて、自分の見解を書き残すように促されて筆をとった。これがいわゆる「徐錫麟供」であるが、内容上は口頭で供述したものと重なる部分が多いものの、一部口述記録にないものがあり、死ぬ直前の彼の問題意識をうかがえて前述の「排満告示」同様貴重である。冒頭「私はもともと革命党の大首領であり、道員の位を得て安慶にきたのは、もっぱら排満のためであって、役人になったのは人を騙して警戒させないようにするためだった」と、自分の身分を明らかにし、続いて、満州政府が立憲を唱えているのは、実は中央集権を強化するためだと暴露する。これは「排満告示」に共通する主張であるが、ここでは更に具体的に「満州人は、立憲すれば革命は失敗すると妄想して」いるが、「立憲は決して達成できるものではなく」「もし中央集権の強化をもって立憲の達成というのであれば、立憲の実現が早ければ早いほど、革命の実現も早くなるであろう」と述べる。彼は立憲一般に反対してはおらず、革命軍が決起し「満州人を殺し尽くすならば、漢人は自ずと強大になり、それから立憲を図っても遅くはない」と考えている。このような立憲に対する見方は、別に彼独得のものではなく、当時の革命派の「共和立憲」の考え方そのものであるといえる。ただ、ここでは、具体的に行動をおこした直後に自らの言葉でそれを語った分だけ、清朝への一層の圧力として迫るものがあったのではないか。⁽²³⁾また、「満州人を殺し尽くす」というのも、満州人なら誰でも殺すというのでは無論なく、清朝政権中に影響力のある満州人高官、具体的には鉄良、端方、良弼などを指していっているのである。そして、このように見てくると、戦術的に對立したはずの陶成章の中央革命論と、やはりどこかで重なるイメージで、政府高官の暗殺を展望していたことが⁽²⁴⁾推量されてくる。

逮捕後、巡警学堂内の徐錫麟の寢室および巡警処の彼の公館が搜索され、銃弾四箱、「革命大元

帥」の証書一枚、排満告示百枚余、手紙などが押収された⁽²⁵⁾。手紙は、方世鈞、沈鈞業、二弟徐偉からのものの他に、父親からのものが含まれていた⁽²⁶⁾。それは数通あって、直前に届いた手紙にも、忠孝を旨とし、恩銘の厚遇に全力で報いるべきことを説き、また、不正な留学生と往来することを切に戒しめる内容が書いてあった。遠く離れた息子に向かって、もはや効果を持ち得ない説諭を、繰り返さずにはおれない父親だった⁽²⁷⁾のであろう。

刑を言い渡される時、徐錫麟は少しもひるむことなく「功名や富貴は心を満足させるものではない、きょう死を得ても恨むところはない」と断言し、死刑が言い渡されたあと写真を撮ったが、自若として恐がる⁽²⁸⁾ところがなかった。両江総督端方の命令で、ただちに刑が執行されることになった。安慶城内は店は戸を閉め、人心は動揺しており、徐錫麟を早く処刑しないと騒ぎが大きくなるかもしれないと恐れたからである⁽²⁹⁾。

これより先、恩銘は午後2時に事切れており、家族からは徐錫麟の心臓を恩銘の霊前に祭りたいとの要請が出されていた。殺した人間の心臓を殺された人間の霊前に祭ることはすでに前例がある⁽³⁰⁾ことで、この要請は受け入れられたが、問題は前例通り首を断つ前に心臓を割くか⁽³¹⁾にあった。役人の中に紹興出身者がいて、そうするのは忍びないという意見が多勢を占め、結局首を断ってから心臓を割くことになった⁽³²⁾。刑は、時間は定かでないが、26日のうちに東轅門で執行された。校長徐錫麟に従って軍器庫に行き、そこで逮捕された学生⁽³³⁾のうちの四人が、彼の処刑に立ち会わされた。徐錫麟は縄られたまま人力車に乗せられて刑場に向かったが、傲然と構えて道々「満人は必ず滅び、漢族は必ず興る。私が今ここで一滴の血を流すならば、それは必ずや花開き実を結ぶであろう。無数の革命志士がきつと私の血の跡を踏んで立ちあがる。満人政府を覆して中華が光復するのはもうすぐだ」⁽³⁴⁾と叫び続けた。道行く人はこの光景を見て、皆感

動して涙を流したという。刑場に着くと処刑執行人が膝まずかせようとしたが、徐錫麟は昂然と頭を上げて「私は満人の前で膝を屈することはできない」といい放ち、「殺すのならさあこのまま殺せ」と叫んで、首をのばしたという。刀が打ちおろされて鮮血が泉のように湧き出た⁽³⁵⁾。執行人は銅の刀と直径七寸の皿を手にして腹部を割て、心臓を取り出して、恩銘の柩に供した。死体は戸板に釘づけにされ大雨が降りしきる中を露天に放置され⁽³⁶⁾、翌27日午前、北門外に埋葬された。享年36歳であった。

安慶蜂起から丸4年経ち、残された革命家達の迂余曲折があった末に、清朝打倒、排満の革命が成功した。それは自ら先駆たらんとして犠牲になった徐錫麟の血が無駄に流れたのではなかったことを証明し、逆賊の地位を一躍革命の先烈の地位に高めることになった。安慶の北門外に葬られていた彼の遺体は、杭州西湖畔の孤山の麓に安置されることになり、陳伯平、馬宗漢のそれと共に掘り出されて、杭州に運ばれたが、上海を経由した際、奇しくも陶成章が辛亥革命前後とみに対立関係を深めていた陳其美の配下蒋介石の手で暗殺され(1912年1月14日)、柩を並べて杭州に運ばれる運命にあった。そして、1月28日杭州のもとの行宮で一万人を集めて「浙省諸烈士追悼大会」が開かれ、徐錫麟は陳伯平、馬宗漢に加えて、秋瑾、竺紹康、陶成章らかつての盟友達と共に烈士として記念されたのである⁽³⁷⁾。時間が現在に飛んで、最近徐錫麟の遺子学文氏はドイツ留学後、貿易の仕事に従事して台湾に健在、彼の娘徐乃錦女士は蔣経国の長男の夫人であると知った⁽³⁸⁾。なんとかつて陶成章を暗殺した蒋介石の孫が、陶成章の同志にして対立したことのある徐錫麟の孫と結ばれているのである。生前徐錫麟が蒋介石と面識があったとは思えず、彼にはまったく預り知らぬことではあるが、その不思議なめぐり合せに、「事実は小

説よりも奇なり”のことは思い出さずにはおかない。

- (1), 『大首領』11頁。なお「徐錫麟安慶起義紀実」は、7時ではなく「5時」とし、他の多くの記録は、ただ「早朝」とのみ記す。また『浙案紀略』上巻第四章第二節（六）安慶之難には、演説の内容が更に詳しく記され、「私は救国の二字においては、敢えて自らを安全な場所に置くことはしない。故に特別な考えを持ち、特別な方法を用いて、きょうからそれを出したいと思う」と語ったとする。

以下、逮捕されるまでの徐錫麟の動きは、『大首領』によって本文を記述し、それに矛盾する内容については、全て“注”に記して対比することにした。

- (2), 『大首領』7頁には、この事情を補足して、恩銘がふだん仕事に出るのは午後2時なのに、この日は特別に8時に学堂に着いたので、徐錫麟は計画がばれたかと疑い、準備が整わぬまま行動に移ることになったとする。予定ではもっと遅くに役人が集合し、したがって徐錫麟の行動も、もっと遅い時間に始まるはずだったことを暗示しているのかもしれない。
- 『浙案紀略』は、恩銘が学堂に現われた「時間が特に早かった」とだけ記す。
- (3), ここでいう卒業式とは、単なる式典を指すのではなく、学生達の日頃の学課や軍事訓練の成果を、卒業試験の名目で巡撫以下省の役人が検閲することを含んでいる。
- (4), 光緒33年6月1日付の「两江總督端方安徽巡撫馮煦致軍機處電」（『徐錫麟安慶起義清方檔案』）によれば、徐錫麟は司道府らに宴会に出ようしきりに誘い、収支委員の顧松にも働きかけ、恩銘以下がそろったら門を閉じ、宴会の席上一網打尽の計を実行しようとした、とする。また、「徐錫麟安慶起義紀実」は、徐錫麟は恩銘らにまず学堂内で休憩する

ように誘ったが、顧松が、徐錫麟はよくない男だから、ここで酒を飲んではいけないと告げ口したので、恩銘は身体調子が悪いからといってことわったとする。しかし、『浙案紀略』には、この点の記述はない。

- (5), 『大首領』には、徐錫麟が恩銘らを急拠第三の式場に誘導した理由は書いていないが、その方が閉じ込めた環境で、巡撫以下をまとめて殺しやすいと考えたからであろう。『浙案紀略』には、この点の記述もない。
- (6), 「徐錫麟安慶起義紀実」によれば、カシミアの黒い警察服を着ており、恩銘はそれを見て「きょうの君の軍服姿は誠に凛凛しい」とほめている。
- (7), 『浙案紀略』は、この言葉が、徐錫麟が陳伯平、馬宗漢としめし合わせた行動開始の暗号だったとする。なお、その時学生として卒業式に参加していた朱蘊山は、徐錫麟が突然靴からピストルを取り出して恩銘を撃つのを遠くから見ており、同時に「革命軍がきょう蜂起した」と叫ぶのをきいたという（「我的老師徐錫麟」、以下「我的老師」と略称）。朱蘊山に従えば、徐錫麟は恩銘一人に語りかけたというよりは、皆に向かって大声で、革命軍の決起を宣言したことになる。
- (8), 『大首領』12頁は、馬宗漢はピストルを発射する時、精神に落ちつきがなく手は震えて、続けて撃てない状態だったとする。『浙案紀略』はその点の記述はなく、また、爆弾を投げつけたのは徐錫麟ではなくて、陳伯平だとする。学生の一人凌孔彰は「陳伯平が突然式場の窓からある物を投げつけたのが見えたが、それが何であるかはわからなかった」という（「徐錫麟安慶起義紀実」）。
- (9), 『浙案紀略』によれば、徐錫麟が恩銘に語ったのは、「この刺客共は……」ではなくて「この革命党は……」（傍点一大里）であり、

恩銘がそれに対して「一体何奴だ」というと、ピストルを撃ちざま「それは私であります」と答えて自分の身分を公言したことになる。

- (10), 『浙案紀略』によれば、顧松がすでに門外に逃げていたのを追いかけて攔まえ、顧松が叩頭して命乞いをするのを、徐錫麟が「この漢奸め」と罵って刀で切りつけ、ついで馬宗漢が射殺したとする。なお、顧松が徐錫麟の蜂起準備を陰で妨害する役割を果たしたことは、すでに見た通りである。「我的老師」は、「顧松は表向きは庶務の仕事をしていたが、実は恩銘が学堂にはなったスパイだった」という。

- (11), 『浙案紀略』によれば、門を閉めるように命じたが、門番はそれに従わなかったので、役人達に逃げられてしまい、そこで腹を立てて、門番を殺したのである。

- (12), 卒業式当初、式場外に整列していた学生は二百名余で、事件後、運動場に残っていたのは三、四十名である（6月10日付両江総督端方致安徽巡撫馮煦電）。この数字によって、学生の大部分も逃げてしまったことがわかる。また「我的老師」によれば、「官生」は眼前で展開する徐錫麟らの行動にびっくりして逃げたしまい、残ったのは「兵生」二十数名だったとする。朱蘊山ら、日頃徐錫麟の意図を了解している学生達が自覚的にその場にとどまったことが推量される。

- (13), 『浙案紀略』には、徐錫麟は学生に、「巡撫はすでに撃たれた。我々は奸細（スパイ）を捕えに行く。すみやかに我々に従い、革命しよう」（傍点一大里）と訴えたことになっている。

- (14), 『浙案紀略』には、一人を斬殺して学生達を服従させた点の記載はない。

- (15), 『浙案紀略』には、軍器庫の総辦に呼びか

けたという記載はない。

- (16), 「我的老師」によれば、そこにあったチェコ製の銃の多くはさびつき、弾も合うものがなくて廃物に等しかった。これらは、李鴻章が淮軍を率いて江蘇で太平天国軍を攻撃した時に使った武器の残りだったという。また、『浙案紀略』にも、銃と弾が合わず、大砲も引き金が取れていて使い物にならなかった、とある。「徐錫麟安慶起義紀実」には、弾薬は全て地下室にあったが、鍵がかかっている取り出せなかったという。

- (17), 『浙案紀略』によれば、軍器庫に着いたあとの行動として、徐錫麟は陳伯平に正門、馬宗漢に後門を守るように命じた、清軍に囲まれたあと、徐錫麟は陳伯平に、囲みを脱して、日頃連絡をとっている各練軍処に応援を頼みに行くよう命じたが、すでに城門が閉じられていて果たせなかった、という。更に、陳伯平が死んだあと馬宗漢は「蜂起がすでに失敗したのだから、ここで軍器庫に火を放って清兵と共に果てるのが一番ではないか」というと、徐錫麟は「我々が殺そうというのは満人なのだ。もし軍器庫を燃したら、善悪を区別せずに全城が焼け尽くすではないか」といって、それを許さなかったという。なお、「徐錫麟安慶起義紀実」によれば、陳伯平が、砲弾を使って城内に攻撃をかけようと提案すると、徐錫麟は、馬宗漢に反対したのと同様の理由で、それに反対した、学生藍昆林に六十一標標統あてに支援を呼びかける手紙をもたせたが、城門が閉じていて渡すことができなかった、とする。同文によれば、更に城内駐留の六十標の管帶丁忽清の率いる一部の部隊が、彼らは実弾を支給されていないし、軍器庫の武器が使えないので、戦力にならなかったという。一標の管帶丁忽清の率いる一部の部隊が支援に来たが、彼らは実弾を支給されていないし、軍器庫

の武器が使えないので、戦力にならなかったらしい。いずれが事実か判断できないが、一部なりとも兵士が支援に駆けつけた点については、その他の資料に照らして、にわかに信じがたい。他に、「我的老師」には、朱蘊山ら学生は後門に配置され、軍器庫の武器が使用不能なので、銃剣や銃竿で清兵と渡り合ったとある。

(18)、「我的老師」には、軍器庫に引き返す際、徐錫麟は大声で「戦闘はここまでにしよう。あとは全て私一人が責任を持つ」と叫んだ、とする。

(19)、『浙案紀略』によれば、徐錫麟が逃げ込んだのは「軍械第三重室」である。

(20)、「我的老師」によれば、馬宗漢と朱蘊山ら学生十数名は、後門で逮捕された。「馬宗漢供」によれば、彼自身は「度胸がないので、武器を持たない学生と共に後門を守り」、学生が「皆塀を越えて逃げだしたのを見て、自分もこわくなり、塀を越えて走り出した時に、兵隊に掴まった」という。あるいは、自分をできるだけ弱い人間と見せるための、偽りの供述かもしれないが、この点の記載も『浙案紀略』には無論ない。その後、馬宗漢は7月16日（陽暦8月24日）に処刑された。そのことを日本では例えば次のように報じた。「徐錫麟殘党死刑（上海8月25日電報）、刺客徐錫麟の徒与の一人なるサカンシ別称マシケイは昨日安徽省安慶府に於て死刑執行せられたり」（『時事新報』明治40年8月27日号）。なお『徐錫麟安慶起義清方檔案』に照らせば、当初誤って陳伯平と馬宗漢の2人が逃走したとして数日間各地で嚴戒体制がとられたことが知れ、日本の新聞記事にもその追跡の緊張感が反映されている。当局の狼狽ぶりをうかがうことができる。

(21)、「我的老師」。但し、他の資料には徐錫麟が審問に先がけて毓朗を弾劾、忌避したとす

る記載はない。例えば『大首領』21頁は、審問の途中徐錫麟が毓朗を指さして「貴様は幸い死を免がれたが、私が殺そうとすれば無事ではすまなかったはずだ」と叫ぶと、毓朗はブルブル震えて身体を支えることができない程だった、とし、『浙案紀略』も同様の記述になっている。事の真偽は不明だが、今は「我的老師」に従う。なお「徐錫麟供」は、当日思銘と毓朗の二人を殺そうと考えていたが、毓朗については果たせなかったという。他に、恩銘を撃った際、徐錫麟は近くにいた馮煦には、君には関係ないからといって、その場を去らせた。という証言もある（「徐錫麟安慶起義紀実」）。これらに従えば、徐錫麟が殺そうとしたのは特定された満人だけであって、漢人を含む役人を一網打尽にしようとしたものではなかったことになる。

(22) 徐錫麟の口述、『大首領』20頁。また「徐錫麟供」では、「私は孫汶と宗旨が合わない。彼が私を暗殺に派遣したのではない」という。他に『浙案紀略』列伝二「徐錫麟」は、「孫文はまったくの小者で」私を命令することなどできはしない、と語ったとするのは、趣旨は変らないものの陶成章の筆の走りすぎというべきか。なお『徐錫麟事迹』附録の「孫中山致徐錫麟」（『四烈士年譜』所収）によれば、孫文は徐錫麟と手紙をやりとりして、共同で蜂起計画を練っている様子が知れる。また『大首領』5頁にも「徐錫麟と孫汶は時々手紙を往来して、密かに武器を中国に運び、全て長江一帯、大通などを經由して運び込んでいる……」という。しかし、これまでみてきた動きからして、徐錫麟が孫文と連絡を取り合っていたとは考えられず、徐錫麟の逮捕後、孫文の率いる同盟会を弾圧する口実として、当局が「孫中山致徐錫麟」の手紙をデッチ上げたのではないかと推測される。李吉奎

「『孫中山致徐錫麟』函件辨偽」（『社会科学戦線』1984年3期）参照。

(23)、安慶蜂起の翌日、立憲準備を促進することを内容とした「憲政予備に関し群言を博採すべしとの上諭」が出されている。『時事新報』明治40年8月22日号「外省官制と立憲予備」が「……遭難事件（安慶蜂起を指す一大里）の刺激を受けて清国政府が人心収攬策として急ぎ発布したるものなりと思考せらる……」
 というのは当たっているであろう。

(24)、何よりも暗殺行動を重視し、それを突破口にして蜂起をおこす戦術は、光復会に共通する考え方だったのである。「はじめに」の注(1)に紹介した「徐錫麟の閲歴」中に、「徐氏等の団体は満州の大官及漢人にして満州に与する立憲党の主なる奸物を暗殺するを専門にするものにて」とあり、また光復会のことを「暗殺団」と呼んでいることが思いおこされる。

(25)、『大首領』18頁。

(26)、6月4日付「安徽巡撫馮煦致兩江總督端方電」。うち、方世鈞からのものは誓書一枚で、それには「光復会に加盟し、共に大業を図ることを誓う」などの言葉が書かれていた。沈鈞業からの手紙は八通で、中に「時機は大事にすべきで、この機会を決して逃すことのないように」などと書いてあった。また、徐偉の手紙には「大きな成果を収めるには、細心の注意が必要だ」、「重要な書類はきちんと片づける必要があり、準備万端整えて、やり残しのないようにすべきである」とあった。三人共、徐錫麟の同志として、これらの手紙を書いて共闘の意志を示したのである。なお、徐偉は、蜂起制圧後に逮捕され、光復会の状況や会員の氏名を供述して、陶成章ら数名に逮捕状がでるきっかけを作った。兄錫麟の審問での態度と対称的ではあるが、徐偉にしてみればとにかく生きのびたかったので

あろうか。供述では認めていないが、自らも会員であり（『辛亥革命紹興資料』張処徳「辛亥革命時期紹興同盟会光復会会員略挙」）、兄錫麟の支援のため安慶に駆けつけようとして、間に合わずに逮捕されたのであろう。当時の報道では、例えば『朝日新聞』明治40年7月20日号は「故徐錫麟の実弟は安徽巡撫暗殺に全く無関係なると判明して放免されたり」と報じたが、1910年出版の『浙案紀略』安慶之難には「今に至るもなお安慶獄中にある」と記しており、辛亥革命勃発後になってから出獄したものらしい。『民立報』辛亥年9月30日（1911年11月20日）号に「徐偉すでに帰る」の広告が見える。また方世鈞については、『朝日新聞』7月21日号に「安徽巡撫馮煦氏は日本在留の清国留学生方其他若干名帰国して騒擾を惹起し以て徐錫麟の処刑に報復するの意思あることを偵知したり……」（・大里）とある方と同一人物と思われるが、事の詳細はわからない。

(27)、『大首領』90頁。なお、徐錫麟処刑後、父親は恭順の意を示して紹興府に出頭した。取り調べでは、息子は自分と「性格がまったく違い、もともと彼のやることには反対だった」、「安徽に行ってから何をしていたかは、私も家族も知らない」と述べている（「大通学堂党案」下）。父の彼に対する態度は相変らずだったことがわかるが、すでに処刑された長男をあくまで悪者にして、逮捕された二男及び逮捕を逃れて姿を消した三男以下をかばっているようにもとれる発言である。父はまもなく無実をもって釈放されたが、家宅搜索のあと父の経営する天生綢庄と泰生油燭淺が閉鎖、財産差し押さえの処分を受けた。この処分が秋瑾への未然の弾圧、処刑と共に当地の人心の憤激を買ったことは、『時事新報』7月17日号に「刺客の閉校閉店」と題して報じられ、

また、『朝日新聞』7月31日号「清国革命党現情」はこれらの処置によって人心はますます清朝を離れ、「革命党の勢力増加を当然とし世人暗に同情を寄するの形勢あり」と記している。他に、徐錫麟の妻王振漢は東京にいて逮捕を免がれた。『朝日新聞』8月14日号「故徐錫麟の妻」に「駐日公使楊樞氏は国際法上政治的犯罪人として故徐錫麟の妻を逮捕する能はざる旨を北京政府に電告したり」という。

(28), 『大首領』27頁。他に『徐錫麟事迹』によれば、「写真を撮り終ると徐錫麟はいった。撮る時笑わなかったから、これを後世に残すことはできない、もう一枚撮ってくれ」。なお、『大首領』には、「徐錫麟処刑時の写真」と題した一枚の写真を収めている。「官紗の袖無しを着、手錠がはめられている」と説明書きのあるそれは、いささかピンぼけすぎて、裸体にされ手を軽く組んでいるように見える。顔つきは前方を鋭くにらんでいるようでもあるが、メガネをはずした分だけ、迫力に欠けるにらみ方である。剃り上がった頭の後方に若干黒いものが見えるのは、かつて帽子の下に隠して写真を撮ったことのある、あの弁髪が垂れているからであろう。

(29), 5月26日付「両江総督端方致車機処電」。
 なお、事件発生直後のまだ鎮圧される前の段階で、両江総督端方は歩兵二箇中隊を現地に派遣し、湖北総督張之洞も陸兵二千及び砲艦二隻を派遣したことが知れる（日本の新聞報道による）。あとから見れば過剰なまでの鎮圧体制をとったことになるが、関係当局がこの事件の拡大にいかにも憂慮したかを見てとれるであろう。

(30), 『浙案紀略』安慶之難。なお前例とは、同治9（1870）年両江総督の馬新貽が張文祥に殺された時の処置（「我的老師」参照）。

(31), 注(30)に同じ。

(32), 『大首領』27頁。なお、「我的老師」は「二十七日朝」といい、陶成章「徐錫麟」はただ「二十七日」という。あるいは審問が夜遅くまでかかり、実際に処刑されたのは翌27日朝になってからの時間だったということか。後考に俟つべきであろう。

(33), 四人とは、「我的老師」によれば、朱蘊山、宋玉琳、楊允中と姚向甫（崇一）である。そのうち、宋玉琳は1911年の黄花岗蜂起に参加して犠牲になり、楊允中は辛亥革命後、安慶での反袁世凱蜂起に参加して軍閥に殺された。四人は徐錫麟の処刑に立ち会わされたあと、監獄に戻され、七日後に釈放され、故郷まで護送された。なお、朱蘊山は晩年全国人民代表大会常務委副委員長を担当し、「我的老師」を口述した半月後（1981年4月30日）に92歳の生涯を終えた。以下、処刑時までの記述は「我的老師」に従う。

(34), 前年（1906）冬、安慶に出発する際の送別会で語った彼の決意と、対になる内容である。進んで自らの血を流すことで、革命の先駆たらんと願っていたのである。

(35), 『浙案紀略』安慶之難によれば、「まず陰囊を撃破したので、首を断ち、心臓を割く時には、徐錫麟はこの世の人ではなかった」という。苦しみを持続させないための、漢人下層役人達の配慮と受けとれる。

(36), 『大首領』27頁。徐錫麟の心臓は、その後恩銘の衛隊の某が煮て食べ、とてもうまかったと人に話すおまけがついた。時の新聞は、そもそも心臓を取りだして遺体に献ずるやり方を時代錯誤と批難すると共に、煮て食べた行為を残忍極まりないこととし、「かつて世界には人食い人種がいると聞いてはいたが、予備立憲の中国でこれを見ろとは思ってもみなかった」と皮肉っており（『大首領』28頁）。

この処置に怒った人々は「剖心裂骨」（『民立報』1912年1月31日号「追悼先烈大事記」）とか「剖腹挖心」（「懷念先祖父徐錫麟」）とかの四字でのちのちまで語り継いだようである。また、秋瑾が安慶蜂起の事後弾圧で逮捕処刑された（6月6日）直後に書かれたと思われる全浙江省出身日本留学生による両江総督端方あて電文」には「皖案の残殺や連座は去年の上諭に違反せり。禍の種をまくは大局を誤まるもとなり、貴公の熟慮を乞う」とある。電文中の残殺、連座はそれぞれ徐錫麟と秋瑾の処刑を指すのは見やすいことだが、「去年の上諭に云々」とは「永遠に残殺、さらし首、凌遲することを禁止した三項と、連座の免除をうたった各条項」を持つ前年の上諭に著しく違反したことを批難しているのである（『大首領』120頁）。なお、「范愛農」は、私がこの論文の冒頭で引用した部分に続けて、「徐錫麟は心臓をえぐられ、恩銘の衛兵のため焼いて食われた。人心はすこぶる激昂した」と書き、更に同郷会を開いて満州政府に抗議電を打つことになったという件りを書くのは、以上のような背景を魯迅が自ら留学生の一人として充分に知り尽くしていたからであろう。

(37), 『民立報』1912年1月31日号「追悼先烈大事記」及び同2月5日号「徐陳馬三家属鳴謝」参照。

(38), 徐文展「蔣總統的兒子与媳婦」（『亜州人半月刊』No.44, 1984年9月15日号）, 若林正文氏の教示による。

あとがき

とにかくにも以上の如くに徐錫麟の生涯をその死までたどってきて、更に時間を飛んでその後の余分なところにもまで話が及んだ。もともとは、これに続けて安慶蜂起つまり彼の最後の一日の行動が辛亥革命総体の中でもった意味を考え

ようとしたのだが、それは今の私には手に余ることであり、すでに予定の枚数を大幅に越えてしまったことを口実にして、やり残すことにした。ただここで一言したいのは、彼が一生のほとんどを故郷ですごしたことの持つ意味についてである。一生を通じて身近に父親との葛藤があったこと、科挙を準備する一方で秘かに身体鍛練や学生の啓蒙を続けたこと……。自ずと、海外に留学したり大都市に遊学して、そこを根拠に革命運動を展開した若者達とは一味違う思考、行動様式を選びとることになったのではないか（その場合、故郷が教育文化水準の高い紹興であったことから受ける影響は当然にも大きかったのだろうが、ここでは触れない）。徐錫麟にいやおうなく感じる思考の求心性や行動の過激さ、また交際範囲の狭さや秘密性などは、生れつきの性格的なものもあろうが、彼が故郷での日常の営みの中で形づくったものではなかったか。とすれば、最後の一日は、日頃故郷で培った愛国の思いと実践が排満という形で凝縮して発現したものであり、徐錫麟にして始めてこのような形で貫徹し得るものであったということになる。

繰り返しになるが、私なりに彼の生涯をとらえ直してみたいと思ったのは、従来の研究で示された徐錫麟像がいささかかかってよすぎるきらいがあるのではないかと疑ったからである。また、中国における歴史研究ならいざ知らず、一人の日本人としては、違う角度から瑣末な事実にとだわって彼の一生をながめてみるのも悪くないのではないかと考えたからでもある。こうしてつづった結果がどんなものか、まるで自信がないのだが、いくつかやり残した課題にこれから取り組むためにも、以上のような略伝をつづる必要があったのだと居直って、筆を擱くことにする。